

鳥飼 民間業者試験は多くの問題を含んでいますが。親の経済格差や地域格差によって民間試験を受ける回数が増えれば、スコアにも影響して受験生が不利を被るだろうし、試験問題にミスがあったときに、今までは民間の検定試験だからあまり表に出てこなかったけれど、今後どのように対処するのかわかりません。それに、大学入試の共通テストで文部科学省が活用しようとしている民間試験は、七業者八種類もあります。レベル別も含めたら二三種類。そんなバラバラな民間業者試験をどのように入試の可否判定に活用できるのかという疑問がわきますよね。そこで出てきたのが、欧州評議会が作ったCEFR(外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠=Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)の段階に換算する方法です。

齋藤 CEFRは、基礎のA1から熟達した言語使用者であるC2まで六つの等級があつて、A2レベル以上のスコアを出願の条件にしようという話が出ています。
鳥飼 TOEFL、英検、GTECなどバラバラなスコアも、CEFRのレベルに置き換えれば大丈夫だと文部科学省は言っているんですが、

実は、CEFRは、「母語の他に二つの言語を学び、相互理解から世界平和に結びつけよう」という欧州評議会の複言語主義を実現するためにできたもので、どの言語を学んでも「私は日本語A1、スペイン語C1」などと共通の尺度で評価ができることを目的としています。六つの等級は参考までに分けただけ。すなわち、重要なのは、どの言語にも使えるということであつて、レベルの定義が重要というわけではないんです。欧州評議会がはっきりと書いています。「この参照レベルは絶対的なものではない。各教育機関で自由に変えていい」と。だから同じA2でも、スペインとスイスとイタリアとは違う。何をもちてA2とするのか、絶対的なものではない、そんな緩やかなものを大学入試の対照表に使うなんて、乱暴です。
齋藤 でも、すでに引込みがつかない状態ですね。

鳥飼 欧州評議会は「CEFRは国際標準ではないので、我々は監視したり調整したりする機関は持っていない」とも書いています。しかも日本人はAレベルが多いという調査結果を知っているようで、Pre-A1すなわち「A1以下」というレベルも設けました。

齋藤 「こっちの試験だとよりいい点数が取れる、

A2がつきやすい」ということになれば、受験生はそちらの試験を受けるようになるでしょう。すると業者は、受験生を集めたい、儲けたいから、自分のところの試験の難易度を下げる。そもそも明確な基準がなければ、そういうことが起こる可能性がある。公平公正を身上としてきた大学入試に、そういった営利が堰を切ったようになだれ込んでくるでしょうね。

鳥飼 入試にはまったくもって向いてないシステムですね。しかもスピーキングの力を誰がどのように測るのが、ブラックボックス。誰も公表していません。

齋藤 二〇二〇年、おそらく大混乱になるでしょう。

鳥飼 大学入試と小学校の教科としての英語は大混乱になりますね。

齋藤 そこで「やっぱりだめだった」と正しい方向に押し戻していければと思います。

間違いが放置されている英語教育

齋藤 そもそも改革が全部素人考えなんです。岡倉由三郎(英語学者、一八六八—一九三六年)のようなきちんとした学者が意見を言う時代ではなくって、今は、政財界が力を持ってしまつ

ています。「抜本的改革」なんて言いますが、小学校の英語教育なんて、明治時代からありましたから。(98頁写真参照)

鳥飼 で、やってみて失敗したんですよね。

齋藤 何度も失敗して、「こんなことに時間かけても無駄だ」ということでやめた歴史を知らずに、小学校から教育すればなんとかなるという発想は情けない。

鳥飼 小学校での英語は、条件が整備されていないという問題が大きいです。特に教員。そもそも小学校には英語の先生がいない。英語を教えた人は、中高の英語教員の免許を取るからです。小学校で英語を教えるなら、まず教員免許法を改正して、小学生を対象に英語教育を行うことができる専門家育てなければならぬはずですね。それをしないまま見切り発車してしまつた。

齋藤 教える人が素人なんだから、当然英語などできるようなわけがないですね。

鳥飼 できるようなところか、間違つた英語をすり込まれかねない。「ネイティブ・スピーカーの講師に来てもらう」と聞けば保護者は安心するようですが、「ネイティブ」といっても母語話者でなかったり、指導方法を知らなかったり、ピンからキリです。子どもたちに真似し

さいとう よしふみ
東京大学教授。英ノッティンガム大学英文科博士課程修了(Ph.D.)。専門の英語文体論・英語教育の他、英文学の翻訳も多く手がける。著書に『教養の力 東大駒場で学ぶこと』(集英社新書)、『英語達人列伝 あっぱれ、日本人の英語』(中公新書)など。



とりかい くみこ
立教大学名誉教授。サウサンプトン大学大学院博士課程修了(Ph.D.)。NHKテレビ『世界へ発信! SNS英語術』講師。著書に『通訳者と戦後日米外交』『英語教育論争から考える』(共にみすず書房)、『英語教育の危機』(ちくま新書)、『子どもの英語にどう向き合うか』(NHK出版新書)など。

